

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

### 横山十四男先生

日 時：2003年8月16日

場 所：東京都狛江市

聞き手：鈴木正弘・茨木智志

#### はじめに

過去の歴史教育を調べ始めると、理解できない記述に遭遇することや、そのときは分かったつもりでも誤解していたことが、経験上しばしばある。これは明治初年を対象としても、30年前を対象としても、同様である。今という同じ時代を共有していても、ある世代の歴史教師の常識がすべて、次の世代の歴史教師の常識になってはいないように思われる。時に様々な機会において、色々な話を聞くことはあるが、断片的なものに留まるのが通常である。

そこで、「歴史教育体験を聞く」と題して、諸先生方の自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、様々な経験や思いをインタビューの形で体系的に聞き取り、その記録を活字にして共有の財産とすることを思いついた。

第1回として横山十四男（よこやま としお）先生にお話を伺った。横山先生は1925年長野県のお生まれで、東京教育大学（筑波大学）附属中学校、筑波大学、東京家政学院大学などで教鞭をとられるかたわら、様々な市民運動の中心的な存在としても活躍されてきた。

以下は横山先生のインタビューの記録である。

#### 1. 最近の関心事

— はじめに最近関心をお持ちのこと等をお聞かせください。

現役中は日本史の研究と教育に埋没してきましたが、筑波大学を辞めて14年ほど環境問題に取り組んできて、歴史研究だけでは現代の歴史的課題を解決するためには不十分だと考えるようになりました。「新しい歴史教科書をつくる会」や自由主義史観などの様々な問題が出てきて、結論が出ていない部分もたくさんあります。戦後歴史学・歴史教育に馴染んできた我々にとっては、バカバカしく思うところもありますが、義民の顕彰運動をしている間に、それは決して軽視すべきものではないのだと考えるようになりました。

ました。私の付き合っている、義民顕彰を進めている、善良な、日本の国を本当に大事に思っている農村の指導者や地方の村の村長さんの中には、「日本の国の誇りを持てるような歴史を学びたい。義民顕彰というのは、そういうことのための非常に重要なことである。21 世紀の社会で義民を顕彰することは愛国心に通ずる」と固く信じている人たちが多くいます。その人たちから「先生、どう思いますか」と聞かれれば、「全くその通り」と答えています。

加えて言うならば、2 年ほど前に韓国人留学生が日本人とともに、レールに落ちた人を助けようとして亡くなりました<sup>1</sup>。その新大久保駅に行くとき義民扱いです。また、植民地時代の台湾に行った日本人巡査で、地元の農民たちの反抗を押し留め、彼らに代わって総督府に意見書を出したら咎めを受けて自殺したという人がいました<sup>2</sup>。日本の江戸時代でも、同じことをして切腹した代官もいて、その後農民たちに祀られています。韓国の人が日本人を救うために命がけで飛び込んだ出来事も同じです。そのようなところに国際的な義民の精神があるかと思います。

現在、私は歴史運動、具体的には「歴史をつくる運動」に取り組んでいます。その成果の一端として西暦 2000 年の多摩川を記録した報告書があります<sup>3</sup>。実は西暦 2000 年の日本全国の村を記録したかったのですが、これはできませんでした。現在、全国に約 500 の村があります。村の数は、市の数よりも少なくなっていました。今、進められている合併により、さらに減るでしょう。そのような境遇にある村というものを伝えて行きたいという願いがあります。近代日本を支えてきたのは村です。学校、駐在所、忠魂碑も含めてすべて村単位でした。その村のエネルギーが日本発展の基礎でした。ナショナリズムの観点からも村人の生活と意識が重要です。

実は私の村は、昭和 32 年に隣村と合併して 10 年後には上田市と合併しました。すると市のはずれの単なる住宅地になって、村人のまとまりもプライドもなくなっていました。それに引きかえ隣の村（青木村）は、私が「義民祭」<sup>4</sup>の開催と義民顕彰の第 1 回に関わったこともあって、誇りを持って張り切ってやっているように見えます。地方の時代と言うが、村人の気持ちを活かす方向でやらねばだめですね。

— 先生がお生まれになったのはどちらの村ですか？

長野県小<sup>ちいさがた</sup> 県郡浦里村<sup>うらさと</sup>という人口 5000 人ほどの村でした。さきほど述べたように現在は上田市になっています。昭和初年には全国で五指に入る更生農村として全国的に有名

<sup>1</sup> 2001 年 1 月 26 日、山手線新大久保駅で線路に転落した人を助けようとした李秀賢（イ・スヒョン）、関根史郎の両氏が亡くなった事故。

<sup>2</sup> 1902 年、森川清治郎巡査が村民のために自殺した事件。地元では「義愛公」として祀られている。

<sup>3</sup> 『西暦 2000 年の多摩川を記録する運動 活動報告書』西暦 2000 年の多摩川を記録する運動実行委員会発行、2002 年 3 月。

<sup>4</sup> 1982 年、青木村で「義民祭」が行なわれ、このときに横山氏は青木村の義民顕彰の歴史を明らかにし、村の活性化に貢献したということで表彰されている。1996 年には第 1 回義民サミットが開催された。

でした。昭和 15 年にドイツのヒトラーユーゲントが日本の模範的な農村が見たいとのことで浦里村にきたほどです。そのとき私は中学 3 年生で歓迎会に出たことを覚えています。

歴史教育にせよ、歴史運動にせよ、原点は村にあると思っています。今まで取り組んできた義民顕彰運動も村単位で一生懸命やっています。これまで 7 回行なわれた「全国義民サミット」は、佐倉惣五郎の成田は市単位ですけれども、他は山間の村や町でやっています。今でも、そこに義民の精神が残っています。現段階の歴史教育の原点はいずれの国もある程度ナショナリズムを核にしていると言わざるを得ない部分があります。筑波大学を辞める前後に、韓国と歴史教育に関連して共同研究をしたことがありました。このときはあまり成果を上げることが出来ませんでしたが、韓国側のナショナリズムを見て、こうした自己の存在を主張する原点、言い換えればナショナリズムの原点は、日本においては良くも悪くも村人の生活の中にあると現在では改めて感じています。

## 2. 小学校から中学校

— 小学校時代のことを、特に歴史教育の思い出を中心に、お聞かせください。

私は 1925 年つまり大正 14 年の生まれで、村における唯一の小学校である浦里尋常高等小学校に昭和 7 年に入学して、昭和 13 年に卒業しました。1 学年は 2 クラスでした。浦里小学校はその後、上田市に合併後、統廃合の対象になりましたが、存続運動がなされた結果、今もあります。私の学年は「マメ・マス」教科書<sup>5</sup>を使用した最後の学年で白黒の地味な教科書であったことを覚えています。教科としての「歴史」は 5・6 年にありましたが、歴史に関わる内容としては、低学年から「修身」の中にありました。

また一番の歴史教育の思い出は「歴史」よりも、「唱歌」です。一の谷の合戦（青葉の笛）、桜井の駅の別れ、四条畷の合戦などの歌<sup>6</sup>を教わりました。普通は 4 年生くらいで教わる歌ですが、3 歳年長の姉から 1 年生のときに教えてもらったことを覚えています。いまだに風呂に入ると出てきます。♪いちのたにの いくさやぶれ…♪、いい歌でしょう。平家物語のハイライトですね。♪あおばしげれる さくらの…♪、この桜井の駅の別れは、楠正成が 11 歳の息子正行を懇々と諭して故郷の母のもとへ返すストーリーが描かれています。当時、意味は半分くらいしか分かりませんでしたけれども、哀調を帯びた調べが印象に残っています。夕食時に母に呼ばれたのに炬燵に首まで入って歌っている 1 年生の自分の姿をよく覚えています。そういう意味で、私の歴史意識は 1 年生の

<sup>5</sup> 1996 年以降の開催地は第 1 回長野県青木村、第 2 回愛媛県日吉村、第 3 回岡山県湯原町、第 4 回群馬県月夜野町、第 5 回千葉県成田市、第 6 回長野県三郷村、第 7 回岩手県田野畑村である。

<sup>6</sup> 第 3 期国定国語教科書の白表紙本である『尋常小学国語読本』巻一は「ハナ ハト マメ マス」で始まっていた。この教科書は 1918 年度から 1932 年度まで使用された。

<sup>7</sup> 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（岩波書店、1958 年）によれば、「青葉の笛」は大和田建樹作詞・田村虎蔵作曲、「青葉茂れる桜井の」は落合直文作詞・奥山朝蒸作曲、「四条畷」は大和田建樹作詞・小山作之助作曲である。

ときから植えつけられましたね。

それから絵本があります。楠正成とか、小学校のとき自宅にあった色々な絵本をよく読みました。こうした唱歌や絵本などの濃厚な歴史のムードを通じて、軍国少年が出来上がりました。

— 5・6年生での「歴史」はいかがでしたか？

教科書も授業も人物伝が中心のものでした。こうした人物中心の歴史教育の影響力はとても強かったと思います。5年生のときは代用教員の美術の先生で、あまり歴史の授業はありませんでした。6年生のときは歴史が得意な教頭先生で、朗々と話をされていました。細かいことは覚えていませんが、強烈に子どもの中に当時の歴史意識が染み込んでいったと思います。

歴史教育は授業よりも学校全体のムードのほうが大きかったと思います。私にとっては歌です。戦後になって、女子向けの歌は残っていますが、男子向けの軍歌や武士道の歌が消えたことを確認しておく必要があると思います。

— 中学校時代のことを、これも歴史教育の思い出を中心に、お聞かせください。

中学は旧制の上田中学校（現・長野県立上田高等学校）です。昭和13年に入学しました。入試のことからお話すると、試験科目に歴史はなく、国語と算数だけでした。受験勉強は小学校で残ってやっていました。私の担任の教頭先生は多忙なため、隣のクラスの先生の下で居残り勉強していました。私のクラスは2人受けて私1人が合格し、隣のクラスは6人ほど受けて4人が合格しました。自転車で約40分、電車・バスですと徒歩区間も入れて1時間ほど通学にかかりました。

上田中学には地域ごとの中学生の親睦会がありました。私は浦里村、青木村、ほか千曲川の西部の村の出身者で構成される「川<sup>かわ</sup>西同志会」の一員でした。ここでは中学5年生がリーダーで、中学1年生を特訓します。真田幸村のプライドを持ち、「気骨と礼節」を標榜する上田中学では、冬に手を入れないためにズボンのポケットを縫ってくることになっていました。その上田中学のいくつかの会の中でも川西同志会は特に盛んに活動をしていました。今から思えば変わった事をして得意になっていたものですが、川西同志会のメンバーの間では、夕方、別れ際に「おはよう」と互いに挨拶するのが決まりでした。この川西同志会の担当は生物の先生でしたが、このかたが1学期に2・3回行われる会合の場で郷土史を教えてくださいました。

— 中学校の歴史の授業はどうでしたか。

「東洋史」は、担当の先生がぼそぼそ話していて、ほとんど覚えていません。難解でさっぱり分かりませんでした。「西洋史」の先生は熱血漢で、古代エジプトとドイツのこ

とを詳しく取り上げたのを記憶しています。「国史」は5年のときに理論的なことを扱ったなかで、「肇国の精神」や「建武の中興」の授業を覚えています。

また中学では「漢文」の授業が印象に残っています。<sup>かさいなんそん</sup>笠井南村<sup>8</sup>という先生で、戦後は大東文化大の教授になられたそうです。戦争中も中国に視察に行ったり、中国服を着て授業をしたりしていた先生でした。中学1年に入ったら、『論語』を暗記するように言われ、2年までかかって論語の半分を覚えしました。社会科の教師になってから授業中に暗唱してみせて、生徒にずいぶんと感心されたのもいい思い出です。

### 3. 陸軍経理学校

— 先生は中学卒業後、陸軍経理学校に進まれたと伺っていますが、学校の内容も含めてお聞かせください。

陸軍経理学校は、補給の重要性に気付いた陸軍が開設した特別の教育コースです。以前は兵科の将校で体を悪くした人などが経理部を担当していました。経理は汚職にもつながりやすく、軍人精神もちゃんとしなければならないということで、昭和11年から、初めて経理部担当士官養成の組織が出来ました。その前は大学の経済学部を出た人たちが1年ぐらいの教育を受けて将校になっていたのを改めて、いわば筋金入りの経理部将校を作ろうとしたものでした。私は昭和18年に8期生で入りました。

受験科目の歴史は国史だけで東洋史・西洋史はありませんでした。一方でアジアの地誌を中心とした地理がありました。国史の「建武の中興の精神がその後どのように歴史に活かされてきたか」という問題だけを覚えています。これは先ほど話した唱歌を覚えていれば書けるものでした。倍率は70倍でした。一高に受かりながら経理学校に来る学生もいました。一高に進んでも学徒出陣で取られますから、いきなり一兵卒で戦争に行くよりは経理学校を出て将校で行く方がよいという計算もあるわけですが。

期間は、正規には陸軍士官学校と同じ4年8ヶ月でしたが、実際には戦時短縮で2年8ヶ月になっていました。私は2年6ヶ月いました。昭和18年4月に入学して、昭和20年9月2日に学校が廃校になって、家に帰りました。

学校は、西武多摩湖線の一橋学園駅の向かいにありました（現在の東京都小平市喜平町付近）。今は、自衛隊の補給廠と建設大学校があります。

— 戦争中の学校の話の色々と伺うと、動員ばかりで授業はほとんどなかったと聞きますが、いかがでしたか。

普通の学校は学徒動員でしたけれど、私達はばっちりやっていました。ただし学科は午前中のみで、午後は訓練でした。一応、経理部将校でも連隊付きや大隊付きがあって

---

<sup>8</sup> 笠井南村：本名は笠井輝男、号は南村または南邨。1911～1982年。漢詩人として知られる。

状況によっては指揮をすべき時があり得るというので歩兵を指揮する訓練とかがありました。正規には予科2年、本科2年でその間に隊付きが8ヶ月でした。予科の間に勉強する内容は普通教育です。語学も、旧制高校ほどの授業時間はありませんが、ドイツ語、英語、中国語、ロシア語から選ぶようになっており、私はドイツ語を勉強しました。他にも数学、化学、物理、国語といった感じです。ただし戦時短縮下の当時は、予科は1年半、隊付きは2ヶ月、本科は1年でした。隊付きでは大阪に行き、内務班に寝泊りしました。

戻ってきて本科で経済とか法律とか被服学、食糧に関する栄養学、物資調達の現地作戦などを勉強しました。法律は、権利関係の民間との交渉があるためです。憲法とか民法とか勉強しました。被服学は、陸軍の補給廠や被服廠の監督をする必要からですが、生地判別や織り方などは真面目に聞いてはいませんでした。また現地で食糧を調達する訓練を各地で行なった記憶があります。

私は剣道2段ということもあり、体力があったために軍隊はあまりつらくはありませんでした。上田中学5年のときに長野県で優勝し、昭和17年8月に主将として全国大会に出ました。通常は明治神宮で開催されていましたが、前年の太平洋戦争開戦もあって特別に橿原神宮で行なわれ、鹿児島商業と室蘭商業に敗退しました。経理学校でも剣道がありましたが、自分はここでは同期生の中で3番目くらいに強く体力もあったので生活全体が楽なものでした。

— 予科のときに「歴史」はありましたか。

ありました。よく覚えています。日本史は東京文理科大学を出た先生でしたが、本当に軍国調の日本史でした。今でも覚えているのは「天照大無辺の精神の展開が歴史である」という言葉です。これは八紘一宇の精神ですけど、本気で教えたのか、陸軍教官だったからやむなくそう教えたのかは分かりません。

西洋史はなかったのか、あまり記憶にありませんが、東洋史はありました。担当は上里美須丸<sup>9</sup>という東京文理科大の東洋史を出た先生で、このかたは割合に客観的な東洋史の授業をされていました。具体的には忘れましたが、特別に中国を蔑視することなく、当時占領していたにもかかわらず、中国のすばらしさを説く授業を受けました。戦後はどこかの大学の先生になられたと聞いています。

— 使用した教科書は覚えていますか。

陸軍教官が独自に作成した教科書だったと思います。「歴史」を含めて一般の書籍を教科書として使用することはありませんでした。ただ戦後は焼いたり、置いてきたりしたため、残っているものはありません。著者名が書かれていたか否かも記憶にありません。

---

<sup>9</sup> 上里美須丸：1982年没。東洋史専攻。

— 2年8ヶ月で卒業のところを2年6ヶ月で廃校になったとのことですが、どのような扱いとなったのでしょうか。卒業でしょうか、中退でしょうか、履歴上はどうなるのですか。そうした経緯を含めて東京高等師範学校に進まれたときのことをお聞かせください。

学校は解散になりましたから、卒業でも中退でもありません。ですから履歴書には書かれませんが。終戦後に陸軍省と文部省とで話し合いをして、軍の学校にいる生徒はその在籍した期間を活かして、文部省の学校に入れることになりました。私達は2年半いましたから高等学校卒業資格があることになり、翌年3月に大学受験が出来ることになりました。これとは別に特別に10月下旬に（旧制）高等学校・専門学校に編入できました。ただし編入する場合には2年生からになりました。それは3年生に編入するとわずかな半年で卒業になってしまうためでした。

同期生は東京商科大（現・一橋大学）に十数人、東京帝国大は5,6人、各地の帝国大にもそれぞれ入りました。なぜ商大かというと、経理学校のすぐ近くにあって先生も商大から講師でたくさん来ていました。教え子でもあるし、近いし、それに経理学校の図書はみな商大に寄付されたとも聞きました。そんなこともあってか、多くの同期生が翌年4月から商大に進みました。この年、旧制高校からの受験者が無かったのが有利だったのです。

#### 4. 東京高等師範学校文科第4部・東京文理科大学

多くの同期生が大学を目指しているときに、私は昭和20年10月下旬に編入試験を受けて11月に東京高等師範学校の2年に編入しました。3年に相当する2年半、経理学校にいましたが、先に述べたように編入の場合は2年編入でした。1期下の後輩も同じく2年編入でしたので、ある意味で1年間損をした感じです。入学した文科第4部は地理歴史科で、これを文四<sup>ぶんし</sup>と称していました。12~13人が受験して、4人が入りました。内訳は陸軍士官学校から2人、海軍兵学校から1人、陸軍経理学校から1人と、バランスよく取っています。陸士から入ったのが佐藤照雄氏<sup>10</sup>です。試験は口頭試問だけでした。地理の花井重次先生<sup>11</sup>は「君は上田の出身だね、では上田の地理的特色を述べてみよ」と言われて、何とか述べました。それから「上田中学卒業のときの席次は」と問われ、「一番です」と答えて、「そうか、よし」という感じでした。日本史では、先ごろ亡くなった家永三郎先生<sup>12</sup>から「維新の三傑は誰ですか」という小学生に対するような質問をされて答えたことを覚えています。

<sup>10</sup> 佐藤照雄：1926年生まれ。日本史、歴史教育、社会科教育専攻。

<sup>11</sup> 花井重次：1900~1981年。自然地理専攻。

<sup>12</sup> 家永三郎：1913~2002年。日本思想史専攻。

— 東京高等師範学校の地理歴史科を受験したのはなぜですか。

経理学校には、商大から講師で来ていた先生がたの他に、東洋史の上里先生や物理の先生のように、高等師範から来ていた先生もたくさんいました。そこで高等師範を受けようと思いました。それから歴史科を選んだのは、経理学校で「天照広大無辺の精神」云々の歴史を習いましたが、日本史を自分で確かめてみようという誠に素朴な動機からです。

— 東京高等師範学校から東京文理科大学に進まれ、最終的に義民伝承の研究というテーマにたどり着かれるものと存じますが、その間の経緯をお聞かせください。

高等師範学校は4年制ですが、3年で東京文理科大学の国史学科に入学しました。文理科大では、中世経済史の小葉田淳先生<sup>13</sup>のもとで、信州上田藩の藩政史をテーマに、経済史的な卒業論文を作成しました。ですから義民そのものの研究はその後です。

義民伝承の研究について思うことは、めぐり合わせが大切だということです。フィールドだった青木村（長野県小県郡）は、いわば百姓一揆のメッカで、“夕立と騒動は青木から”という言葉があるほどです。ここにはすごくいい百姓一揆の史料がありました。文理科大卒業後、夏休みに帰省して、青木村の古文書を読んでいました。昭和28年に雑誌『信濃』に初めて青木村の百姓一揆史料の紹介を載せ<sup>14</sup>、翌年には『史潮』に論文を載せました<sup>15</sup>。このとき「義民の伝承」という題で出したところ、編集長だった和歌

森太郎先生<sup>16</sup>から「義民の伝承」の方が良いのでは、と指摘されて改めました。その後「伝承」を使い続けてきましたが、今から思うと、やはり「伝統」の方が適していたのでは、と考えることがあります。

この研究が後に学位論文<sup>17</sup>になりましたが、当時はそんなことまで考えていませんでした。筑波大学に移ってから、一級下の芳賀登氏<sup>18</sup>の勧めもあり、歴史・人類学系に提出しました。審査には岩崎宏之<sup>19</sup>、熊倉功<sup>20</sup>、宮田登<sup>21</sup>の各氏が当たられました。後に少し勘ぐると、筑波大学の博士論文審査には、他の学系の審査委員が必要であり、教育学系

---

<sup>13</sup> 小葉田淳：1905～2001年。日本経済史専攻。

<sup>14</sup> 横山十四男「上田藩浦野組で起こった百姓一揆」『信濃』5－11・12合併号、1953年。

<sup>15</sup> 横山十四男「義民の伝承」『史潮』54号、1954年。

<sup>16</sup> 和歌森太郎：1915～1977年。専攻は日本史学・民俗学。

<sup>17</sup> 横山十四男『義民伝承の研究』三一書房、1985年。

<sup>18</sup> 芳賀登：1926年生まれ。日本史専攻。

<sup>19</sup> 岩崎宏之：1936年生まれ。日本史専攻。

<sup>20</sup> 熊倉功夫：1943年生まれ。日本文化史専攻。

<sup>21</sup> 宮田登：1936～2000年。民俗学専攻。



にいた私にそうした役回りを期待したのかもしれませんが。その後多くの論文審査を依頼されて本当に大変でした。

## 5. 高等学校での歴史教育

— 先生の教育活動について歴史教育を中心にお聞かせください。まずは戦後のことからお願いします。

私は大学卒業後、高等学校に6年、東京教育大（筑波大）附属中学校に25年、筑波大学に9年、東京家政学院大学に7年勤めました。

まずは高等学校ですが、はじめは横浜市立港高等学校定時制に勤めました。昭和25年3月に文理大を卒業した後、就職もせずに勉強しようと考えて4月から研究科に籍を置いていました。すると渡辺一郎という武道史の2年先輩が文理大の助手に決まり、急に港高校を辞めたため、急遽、私が研究科に籍を置きながら教諭として勤めることになりました。これが4月10日でした。24歳のときでしたが、行っていきなり4年生の担任になりました。港高校は今の中華街の入り口近くにあり、近くの米軍補給基地で働いていた年上の生徒も多く通っていました。この年の秋のある日、代用教員で生計を立てている37歳の戦争未亡人の生徒に、出席不足のため、このままでは卒業ができないことを告げると、翌日職員室から呼び出され、境遇を縷々聞かされた上で、「ごまかしてでも卒業させてもらわないと困る」と言われ、私から頭を下げて謝ったこともありました。受験を目指す生徒は数人に過ぎなかったこともあり、授業の他に人生を語らうのが教師の務めでした。当時は中小企業の従業員の首切りも多く、給料の遅配・欠配もあったので、授業料の納入のできない生徒にお金を貸したことや、生徒に連れられて桜木町のきたない店に行ったことや、夏休みに生徒たちと志賀高原などへ出かけたことが思い出されます。

昭和25年度は「世界史」と「一般社会」を合計週15時間ほど担当しました。「一般社会」は『民主主義』<sup>22</sup>を教科書としました。「世界史」は成城大学の尾鍋輝彦先生<sup>23</sup>の『100ページの世界史』<sup>24</sup>を使いました。港高校校長の黒沢先生が旧制の成城高校の講師に行っておられたので、尾鍋先生と同僚でした。それで校長から「尾鍋さんの本を使いなさいよ」ということで渡されて教科書としました。そういえば尾鍋先生が港高校の生徒向けに講演をしたこともありました。紐をつけた眼鏡をかけてらしたのを印象深く記憶しています。私は日本史が専門ですが、すでに長野正先生がいたため「世界史」の授業を担当しました。ただ翌年度に世界史専門の先生が来て、日本史専門の長野先生が転出されたので、私の授業は「日本史」中心になりました。ですから「世界史」の授業をしたのは昭和25年度の1年間だけでした。

---

<sup>22</sup> 文部省『民主主義』上巻（1948年10月翻刻発行）、下巻（1949年8月翻刻発行）。

<sup>23</sup> 尾鍋輝彦：1908～1997年。西洋史専攻。

<sup>24</sup> 尾鍋輝彦『100ページの世界史』新教育事業協会、1949年12月。

昭和 28 年からは東京都立第四商業高等学校池袋分校（現・池袋商業高等学校）に転出しました。ここも定時制だったこともあり、引き続き文理科大の研究科に籍を置きながら昼間は大学で講義を受けて夜に授業をしました。

また、これとは別に横浜市鶴見の橘学苑という女子高で 3 年間非常勤講師をしました。ここは当時石川島重工の社長であった土光敏夫氏<sup>25</sup>が校長をしていました。中学と高校の「日本史」を担当しましたが、教科書等は覚えていません。このとき 2 年生は 8 人しかいませんでした。春の陽気のいい日、生徒たちを連れて裏山で授業をしたことがあります。そして戻るときに青大将を見つけ、いたずら心で捕まえて職員室の電熱器で焼いて食べたところ、学校中が臭くなってしまい往生しましたが、それでも特に文句も言われない鷹揚な時代でした。その日に桜木町事件<sup>26</sup>があったことをよく覚えています。

— 同級生の方々との研究会を始めたのはこの頃からですか。

研究会は昭和 26 年からです。これは現在も続いています。私が高校 6 年、附属中学校 25 年と、長く現場で歴史教育に当たりながら、いちおう日本史研究の学会動向などを知り、めぼしい学術論文・業績等を目を通して理解して来ることが出来たのは、この大学の同級生の研究会のおかげです。毎月 1～2 回、大てい明治大学の研究室（木村礎氏<sup>27</sup>の勤務先）、時には中央大学の研究室（島田次郎氏<sup>28</sup>の勤務先）で研究会を持ち、時々注目すべき論文や書物の合評会をしたり、各人の論文を発表前に、検討し合う機会にしていました。

この仲間で今までに『日本封建社会研究史』<sup>29</sup>、『続日本封建社会研究史』<sup>30</sup>、『戦後歴史学を生きる』<sup>31</sup>の 3 冊の本を出版していますが、3 番目の本の中には各人の個人研究歴と発表論文を 1951 年から 1988 年まで一年ごとに記してあります。

— 新科目であった「世界史」の授業をするに当たって参考にしたものをお聞かせください。

「世界史」の授業のために参考とした本は各 100 頁ぐらいの紙表紙の講座本（出版社失念）を中心にしましたが、その他は覚えていません。当時は良い参考書がありませんでした。私は高等師範・文理科大学で酒井忠夫<sup>32</sup>・清水泰次<sup>33</sup>両先生の東洋史の講義、杉

---

<sup>25</sup> 土光敏夫：1896～1988 年。橘学苑は 1942 年に母・土光登美が創設した。

<sup>26</sup> 1951 年 4 月 24 日に国電京浜線桜木町駅で起こった、多くの死傷者を出した電車火災。

<sup>27</sup> 木村礎：1924 年生まれ。日本史専攻。

<sup>28</sup> 島田次郎：1924 年生まれ。日本史専攻。

<sup>29</sup> 木村礎・島田次郎・田中充・鶴岡静夫・横山十四男『日本封建社会研究史』文雅堂書店、1956 年。

<sup>30</sup> 木村礎・島田次郎・田中充・鶴岡静夫・横山十四男『続日本封建社会研究史』文雅堂銀行研究所、1972 年。

<sup>31</sup> 木村礎・島田次郎・田中充・横山十四男『戦後歴史学を生きる』三省堂、1989 年。

<sup>32</sup> 酒井忠夫：1912 年生まれ。東洋史専攻。

勇<sup>34</sup>・中川一男<sup>35</sup>両先生の西洋史の講義は受けました。特に杉先生は強烈な印象が残っています。そういえば、有高巖先生<sup>36</sup>の東洋史に関する戦前の本を戦後に読んだ記憶があります。学習指導要領は当時読んだ覚えがありません。西洋史は何を参考にしたのか忘れてしまいました。

「世界史」は講義形式で授業をしました。定時制であったこともあり、体系的に進めるというよりも、少しでも自分の知っていることが出てくると、その話ばかりしていたような記憶があります。つまり自分が話の出来る内容のみを大きく取り上げて行い、忠実に教科書どおりに進めるということはなかったと思います。ただ、「世界史」以外の授業も含めて、新しい民主主義の在るべき姿、またヨーロッパの市民革命などのすばらしさなどを一生懸命に説明しようとしていました。

— 「日本史」ではどのような本を参考にされましたか。

「日本史」で参考にした本は自分が持っていたこともあって、それなりにありました。特に西田直二郎先生の『日本文化史序説』<sup>37</sup>などを読みました。ただ教科書は「日本史」の授業ではほとんど使わなかったため、何を採用したのかすら記憶にありません。『くにのあゆみ』<sup>38</sup>は出たときに見ました。考古学から記述が始まっていたのが印象に残っています。

また『新日本歴史』<sup>39</sup>という講座ものが出ました。少し余談になりますが、実は、私は文理科大学2年のときから、2年間ほどこの本の編集の手伝いをしていました。出版者の「新日本歴史学会」は、実際には、戦前に読売新聞の社会部長だった松川二郎というかたが大塚の近くの自宅において一人で始めたものでした。文理科大の学生がアルバイトに求められ、誰だかの紹介で行きました。原稿受け取りなどの小間使いが主な仕事でしたが、一度、一泊で登呂遺跡の発掘を取材に行かせてくれました。その後、ここから出た『登呂遺跡調査白書』<sup>40</sup>に掲載された写真は、私が私のカメラで撮ったものです。とてもうれしかったことを覚えています。大切に持っていましたが大水害で流されてしまい、手許にないのが残念です<sup>41</sup>。この講座には初めて歴史が書き換えられるという意味

---

<sup>33</sup> 清水泰次：1890～1960年。東洋史専攻。

<sup>34</sup> 杉勇：1904～1989年。古代オリエント史専攻。

<sup>35</sup> 中川一男：1893～1948年。西洋史専攻。

<sup>36</sup> 有高巖：1884～1968年。東洋史専攻。

<sup>37</sup> 西田直二郎『日本文化史序説』改造社、1932年（1949年再版）。

<sup>38</sup> 『くにのあゆみ』上下、文部省、1946年9月翻刻発行。

<sup>39</sup> 新日本歴史学会編集・発行『新日本歴史』第1巻～第6巻、1947年～1949年。第1巻は「日本人の発祥から天皇制の成立まで」、第2巻は「奈良・平安時代」、第3巻は「前期封建時代」、第4巻は「後期封建時代」、第5巻は「近代編」であった。また後に「増補編」が第6巻として発行された。

<sup>40</sup> 新日本歴史学会編集・発行『登呂遺跡調査白書』、1949年（『新日本歴史』第8巻）。

<sup>41</sup> 1974年9月2日、横山氏は台風16号による多摩川水害で東京都狛江市の自宅を被災された。

があったと思います。そのためか、原稿依頼をすると、肥後和男先生<sup>42</sup>など有名な先生方も喜んで執筆してくれて5巻ものの講座（後に増巻）が出来上がりました。

当時は学校の先生方も新しいものがなければ授業が出来ない状況にありました。そのため、私が昭和24年の夏休みに、この『新日本歴史』の見本を持って地方の小学校をまわると飛ぶように売れました。5巻で900円くらいだったと思いますが、売れるとその1割以上の手当てをくれたため、私の収入が1万円くらいになりました。米が1升30円くらい、文理科大の授業料が年額600円くらいの時代でしたから、それで潤って大学を無事卒業しました。

— 新しく始まった社会科について、どのような感想をもたれたのかお聞かせください。

社会科ができたことは知っていましたが、実は全然関心ありませんでした。はじめに勤めたのが高校であったためか、社会科の教師という意識よりも歴史の教師という意識が強かったように思います。附属中学に行ってから別ですが。

## 6. 中学校での社会科教育

— その後の東京教育大学附属中学校でのお仕事についてお聞かせください。

中学校の教師を勤めたのが一番長く、25年ほどになります。本気で教師の仕事に取り組んだのは中学の教師になってからでした。非常勤講師をしたことがきっかけになって、昭和31年に附属中学の専任になりました。地理と公民の先生は別にいて、歴史は教頭

の谷口五男先生<sup>43</sup>と私の2人でしたので、歴史を担当しました。教科書は谷口先生の関係で昇龍堂の教科書を使いました。自分も後に教科書編集に加わるようになりましたが、この会社の社会科教科書は今はありません。途中から中教出版の教科書に変えました。

附属中学に行くまでの6年間の授業は、自分のできることだけをやった感がありますが、附属ではすべきことがしっかりとありました。いつ何時だれが見学に来てもいい学校でもあり、一生懸命に取り組みました。私が附属中学で取り組んだ一番大きなテーマは国際理解教育<sup>44</sup>でした。これはユネスコの協同実験研究として昭和29年から行なわれていました。日本での実験学校は、東京教育大学附属中学・高校、広島大学附属中学・高校、和光学園中学、そして在日外国人居住者が多かった川崎市立田島中学の6つでした。当時、日本は国連に加盟しておらず、国連加盟を促進するためにも、ユネスコの研究を立派に仕上げようと、大学も含めて熱心に取り組まれていました。文部省の中にもユネ

---

<sup>42</sup> 肥後和男：1899～1981年。日本史専攻。

<sup>43</sup> 谷口五男：1918～1986年。社会科担当。教科書・参考書を多数執筆。

<sup>44</sup> 梶哲夫・横山十四男・中川浩一「ユネスコ教育実験をめぐる」『桐風会会報』第10号、1996年10月）参照。

スコ国内委員会の職員が 5, 6 人いて、予算もたくさんつきましたし、大学からも教育学と心理学の教授が毎週来て、校内委員と一緒に計画を検討しました。そこに私が入り、いきなりユネスコの委員を仰せつかって、実験研究で大変苦労しました。

4 クラスの中で、私が担任した 1 クラスを実験クラス、他の 3 クラスを比較クラスとして、実権クラスの中の男女 17 人を選定したうえで、知能指数、環境、成績がほとんど同じ 17 人を、他のクラスから取り上げて、プリテストとポストテストにより比較して有意差を出すという本格的なものでした。他国理解とか人権尊重の意識などの研究もなされましたが、私は「女性の権利を尊重する態度」の研究を行ないました。40 数年前は現実社会のなかに男女の格差がまだまだありました。歴史の授業で男尊女卑の起源などを取り上げ、ホームルーム指導や文化祭の演劇についても実験研究を意識して進めました。英語に訳されてパリの本部に送られたレポートは、ユネスコ本部で称賛されたとのことで面目を施しました。ユネスコ実験研究 25 周年には表彰状をもらいました。実に苦労しましたが、自分の教育研究ではこれが一番立派なものです。最近クラス会があって、それを説明したところ、「何であんな授業をしたのかやっと分かりました」と言われました。内容をよく覚えていてくれたのは、やはり女子の生徒ですね。

— 学習指導要領作成にも関わられていらしたと存じますが。

文部省の協力委員は昭和 52 年版です<sup>45</sup>。このときの調査官は同級生の佐藤照雄氏でした。彼が案を作成し、文のほとんどを書きました。佐藤氏は高等師範卒業後に実践中学に就職しましたが、ストライキ問題で職を辞し、文理科大に入りなおした人物です。私にとっては基敵でもあります。

— その後、筑波大学に移られるわけですね。

昭和 43 年から東京教育大学の「歴史教育法」の非常勤講師をしていました。教育大には歴史教育の専門の人はいませんでした。筑波大学となって修士課程の教育研究科ができたため大学の専任になり、9 年 3 ヶ月勤めました。

## 7. 戦中・戦後を振り返って

— (鈴木) 先生は私の亡父と同じ大正 14 年のお生まれですが、自分たちをどのような世代とお考えですか。

みんなが軍人を目指した、今とは全く別な世界でしたが、戦後も気骨のようなものは

---

<sup>45</sup> 文部省『中学校学習指導要領(昭和 52 年 7 月)』大蔵省印刷局、1977 年。および文部省『中学校指導書 社会編(昭和 53 年 5 月)』大阪書籍、1982 年(4 版)。また、これ以前に横山氏は文部省の中学校学習指導資料(社会)の作成に関わられている。

共通しているのかも知れません。私の年代はちょうど徴兵の境目で、同年の人の多くは軍隊には行っているが海外の戦争には行っていない。ところが 1, 2 年上の人は海外の戦争に行っているため、多くの人が戦死しました。逆に 1 年下の人は軍隊の経験がありません。私達はそういう意味で特殊な世界を生きた世代ではないかと思います。

— 昭和 20 年 8 月 15 日はどちらにいらしたのですか。

8 月 15 日は金沢にいました。陸軍経理学校は、7 月下旬に金沢の高等女学校の校舎に疎開していたためです。まだ荷物の整理中でしたが、「重大な放送があるから農家に行ってラジオを聴くように」とのことで、話を聴いたところガーガー言うだけで何も分かりませんでした。戻ってから区隊長が解説してくれて戦争が終わったことを知りました。東京の本校に帰ってきてから 1 週間位して、9 月 2 日に経理学校は解散になりました。その間、おたおたしていただけでした。

10 年程前に跡地の自衛隊に見学に行ったら、丁重に扱われて資料館らしきところに案内されました。ただ、そこに経理学校の関係書類などが残されているのかは分かりません。同窓会は十誠会という名称で続いています。靖国神社に対しても、同窓生の意見は賛否両論あります。その後自衛隊に入った人もいますし、同期生からは 5, 6 人ですが、教育界に入った人もいます。

— 戦後すぐに歴史の研究を目指されたわけですが、その頃の様子をお聞かせください。

昭和 20 年 11 月に 20 歳になりましたけれども、それまで軍国主義の雰囲気の中で生きて来たため、戦後は一時茫然自失な時もありました。私は田舎に帰って百姓をしており、半年くらいは何もしませんでした。高等師範も校舎が半分焼けていて、授業は文科と理科とで交互に半年なかった状態でした。先生方も家が焼けて家族で研究室に寝泊りしている人もいました。本はほとんどありませんし、先生も食うや食わずで、ろくな授業はできなかったようです。特に昭和 20～21 年はある意味で異常な時代でした。何を勉強したかと問われても覚えていません。友人の田中充氏<sup>46</sup>から 5, 6 冊本を借りて、間借り先には置く場所もないため、学校に置いておいたところ盗まれてしまい、仕方なく米で償ったこともありました。先生も復員してない人がいましたし、本を疎開させて

いて手許になかった先生もいました。<sup>やまとやすお</sup>大和資雄先生の英語の授業は漫談が多く、ドイツ語の先生は授業をせずに川柳の話をしていました。昭和 20 年の 12 月ごろでしたか、皇国史観で活躍していた先生がパージになりました。また、ある日、哲学の先生が「資本論は間違っている」と涙を拭いながら教壇で熱弁を振るったため、学生一同があっけにとられたことがありました。ほどなく、その先生はパージが決まっていたことが分かるという状態でした。戻った人も戻らなかった人もいました。とにかく先生も、校舎も、

---

<sup>46</sup> 田中充：1925 年生まれ。日本史専攻。

生徒も、何もかもがこの頃は揃っていませんでした。栄養失調で死んだ同級生もありました。翌年 3 月まではろくな授業になりませんでした。その後も米はありませんし、2・1 ストで揉めたり、思想的な様々な激動もありました。共産党が山村工作隊を奨励して革命を目指していた時期でもあり、友人でも山に入って大学に来なくなる者もありました。まともに大学に来ているのはバカだという雰囲気がなくもない状況でした。つまり落ちて勉強できる状態ではありませんでした。ゼミでもテキストがありませんので、図書館の『大日本古文書』をガリ版で刷って使っていました。そのような中で、今でも可笑しく思い出されるのは、芳賀幸四郎先生<sup>47</sup>の古文書演習の試験で、出題後先生が出て行かれたのを幸い、皆で“共同作業”をして同じ内容の答案を提出したのですが、なぜか私は合格、後に明治大学の学長になる木村礎氏は不合格でした。

— 最後にこれからの歴史教育の展望と御自身の抱負をお聞かせください。

自分としては専門の歴史研究者というものでも、専門の教育者というものでもないと思ってきました。最近では歴史研究者・歴史教育者に歴史運動家というものを加えて、総合的に「歴史をつくる運動」をしてみたいと考えています。私が取り組んできた義民顕彰も歴史運動の一環です。冒頭で述べました西暦 2000 年の全国の村の記録をつくる運動は、多摩川だけにとどまりました。しかし明治初年につくられた村こそが、共同体として近代以降の日本を支えてきました。その村がなくなろうとしています。これでは日本は伝統を見失い、何かのきっかけで崩れ落ちるもろさがあります。地域を大事にしていく主張は以前からありましたが、鶴見和子氏も指摘しているように内発的な盛り上げの必要があります<sup>48</sup>。社会学とか、歴史学とかで、ばらばらに検討していたのでは、現在の歴史を動かしているものが何かは分かりません。

歴史の教師は、現在の歴史的課題は何かを考えた上で、歴史教育は何を軸に行なうべきかを考える必要があります。E. H. カーは「歴史は過去と現在の対話である」と言いました<sup>49</sup>が、これでは不十分です。私はここに未来を加えて、過去と現在を対話させて、未来をいかに構成するかを考えることが歴史研究の重要なねらいであると主張しています。特に歴史教育は構想力と情熱が大切です。歴史教師として歴史教育の基礎とするのは何か、何をを目指すのかという、未来志向的な情熱を持たずして、教室で生徒に話ではできません。それが教師の持つ人間としての影響を生徒に与えることになります。この観点から私は、環境史観を構築しようと考えています。近くその成果をお目にかける心づもりで計画を進めております。

— 本日はどうもありがとうございました。

---

<sup>47</sup> 芳賀幸四郎：1908～1996 年。日本史専攻。

<sup>48</sup> 鶴見和子『内発的發展論の展開』（筑摩書房、1996 年）など。

<sup>49</sup> E. H. カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』、岩波書店、1962 年。

## 後 記

インタビューの際に多くの御論考を拝受し、その一部は文中の注記の形で紹介した。横山先生の著作目録等は、梶哲夫先生・横山十四男先生退官記念出版会編『社会科教育40年―課題と展望―』（明治図書、1989年）に掲載されているが、これ以後に発表され、かつ注記したもの以外の論文等を以下に掲げることで、横山先生が最近取り組まれていることの一端を紹介申し上げたい。

1. 「歴史教育から歴史学研究へ―信濃の地域性に根ざした課題を求めて―」  
（『信濃』第41巻第8号、1989年8月）。
2. 「われは山の子―筑波大学教育学系特別講演（最終講義）再録」、1989(平成元年)年。
3. 「義民伝承小秘録」（『帝京史学』第7号、1992年2月）。
4. 『戦後五十年に思う ―本学学生のレポートから―』  
（東京家政学院大学人文学部日本文化学科日本社会史研究室：横山十四男、1995年10月）。
5. 「義民顕彰の流れに棹さして―義民顕彰の現代的意義を考える―」  
（新潟県新発田市「与茂七を偲ぶ会」での講演）。
6. 「西暦2000年の多摩川を記録する運動」  
（『NEWS』第54号、三多摩自然環境センター、1998年2月）。
7. 「多摩地域の歴史的特性と自然環境市民運動」  
（『NEWS』第79～82号、三多摩自然環境センター、2000年7月～）。
8. 「「平和憲法50年」と「江戸後期定常型社会130年」の歴史体験」  
（『ひろば狛江』第78号、共生のまち狛江をめざす会、2002年6月）。
9. 「生きるって：多摩川流域研究所・文学博士 横山十四男さん」  
（『東京新聞』2002年11月17日）。
10. 『多摩の環境市民運動・環境史観序説』  
（百水社〔東京都八王子市〕、2003年12月刊〔予定〕）。

最後に、ご多忙にもかかわらずインタビューの申し出に快く応じてくださり、長時間にわたりお話をしてくださった横山十四男先生に感謝申し上げます。

（注記に関して、多くの文献やホームページの情報を利用させていただいたことを申し添えます。）

（文責：茨木智志）